

特116

953

橋旭翁作譜

蕾の花

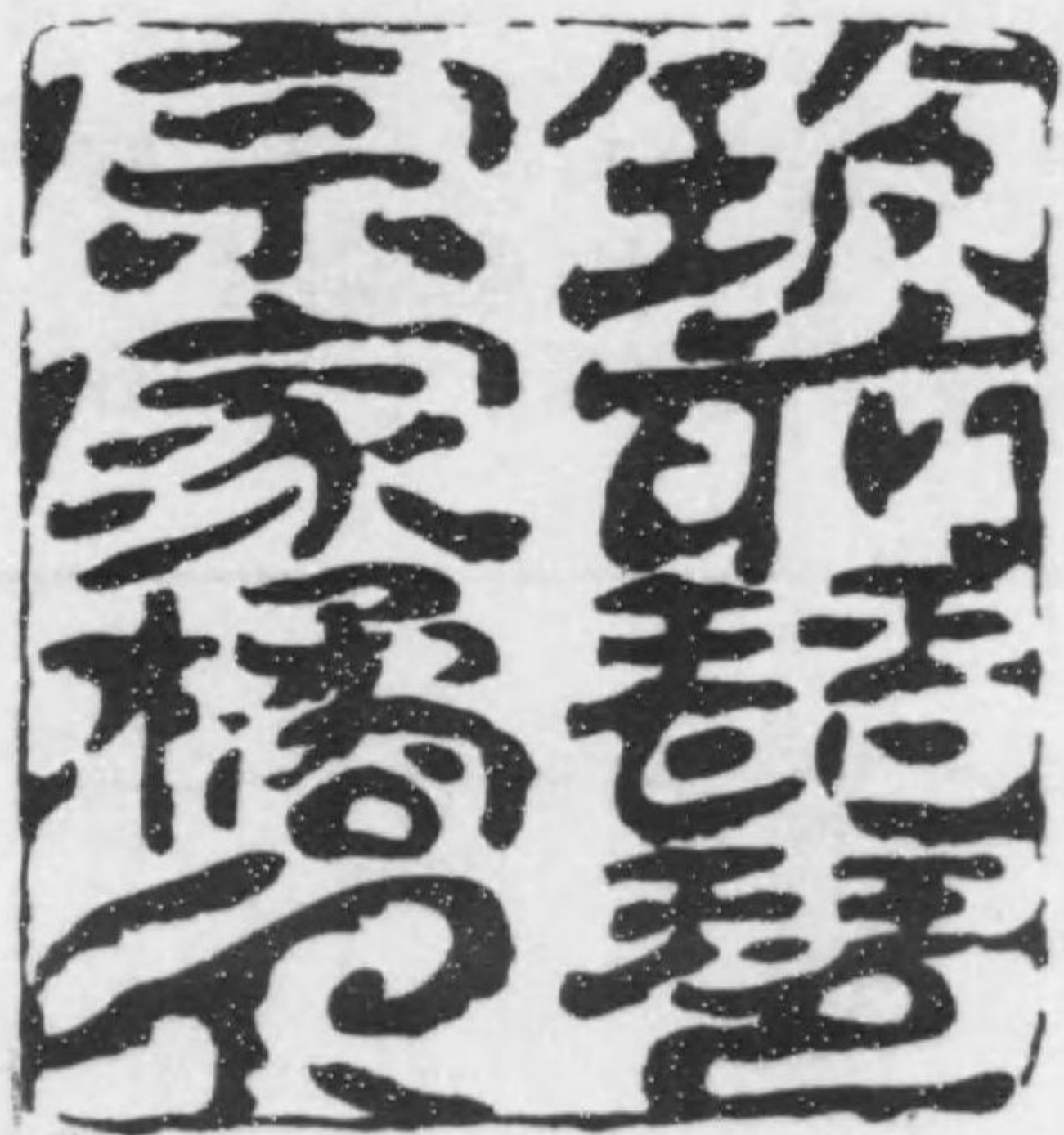
~~149
180~~

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18

始



特116
953



六さても落行く人々は

五朝長頼朝ははめどし

三主従わづか二十餘騎

甲唯すごくとをちちの

上夏 たづきもいづや白雪を

中うまの蹄に踏みだき

下 覺東なくもたどりしが

四ヤガテ義朝馬をとめ

三鎌田兵衛政家を

一ほとり間近く招き寄せ

六われら都を落ち去らば

五汝がもとにのこつる

四 姫は敵にぞとらはれむ

三汝これより引きかへし

四 姫をうしなひ来れよと

六つれなま様もて慈悲籠る

五 君が仰せをかこみて

三政家馬をあかりつと

五露 都の方へかへしけし

四こゝに六條堀河の

流れも清き源の

義朝の長女扶桑姫は

三 清経に勤め居給ひしが

三 政家の余来り姿御覽し

四 汝よくこそ帰りしよな

四 戦の模様如何ぞやと

上秋 流石は武門の姫なれば

中 年端ゆかねど凜々敷も

下 だづね問せ給ふもぞ

二 政家ハツト胸せまり

五 しばし口籠り扣へしが

三 漸くわづかに顔を上げ

五 今日のいくさ不幸にも

五 味方利をうしなひ候故

四 大将には東國に御開き

有可しとの御事に候

七 さては父上にはあつまへ

☆ 御下向ありせ給ふとな

四 嗚呼今のいままでも

御勝利をのみ祈しをと

五 顔打ち覆伏したまふ
二号

五 とごろく胸を押し鎮め
九番

五 故さら見極めまねれとて

五 聲ふるはせて申ければ

七 思ふに貴きも賤きも

七 政家涙に咽び居たりが

三 父君には姫の御身を憂へ

四 此政家を帰給ひて候と

三 姫は形容をあらためて

六 女子程悲しき者はなし

五 弟頼朝は十三歳にてあり乍ら

三 妾は一つ優りの姉なるに

五 復もなげかせ給ひこそ

四 姫は涙をせきことめつこ

五 汝が許しやしなはれて

三 軍に志たかひ出でつるに

三 おん供とても叶はずと

二 道理せめておはれなれ

四 我幼少にて母上は後れ

三 これまでのころづかひ

五 あけくれくわぶん おも 明暮過分に思ひぞや 十九号

五 たし おも ま又え度とは思へども

三 いま わがくび 今はたゞ我首を斬り

三 をい のたま いと雄々しくも宣ひて

七 かまだ ひやうゑ ひめぎみ 鎌田兵衛は姫君に

六 なごり ちいへ せめて名残に父上に

八 おんあといた 御跡慕事なる難し 九号

三 ちいへ みこり やす 父上の御心を息めよと 土

二 かっやう 合掌してぞ待ちたまふ 十三号

六 むつき うち 襦袢の中よりかづきて

五 こい げふよわん 六はる むか 此に十四年の春を迎へ

三 ぜんせい いかへい ぞと 前世如何なる罪業ぞと 木

三 せんかた 詮方なくもあきくらめつ 九番下

三 おん ーろし くだ たま 御首級を下し賜われと 水

六 かみ へえり 髪くろぐいと頸きよく 一号上

二 つばみ 三はな 蕾の花を散らすとは

一 なみだ やみ 涙の闇にまよひし 切

三 おん いたは さうらは御悼しく候へ共

五 夕日 けしろ 背後に立ち立ちつれど

二 げんじ ちよ あふ 源氏の息女と仰がる

三 果報めで度うしあかげ
くわほう たきー

五 五體しびれて立ちすくみ
ごたい ー六た
水地

五 胸を切りさく思ひの又
むね き六ー 七かも 五いほ
三号

五 天晴武勇の政家も
あつばれぶゆー まいー

六 折しも聞ゆる馬の響
さきり 四まこー にんば ひらき
三号

五 見るに眼も暮れ心消え
み ぬめ くら へしーりま

六 カラリと落す大刀よりも
おと たち

七 百萬の敵にも懼れざる
ひやくまん てきー 六かそ

五 暫時躊躇居たりけり
しばし たゆたい ね
廿五号

四 ちや討手の軍兵寄せつるか
へうつて ぐんびやうよ

斯ては猶豫なり難しと
かく いゆうよ なた
四番

竊に背門より忍出で
ひそか せど ーのびい
水地

三 近江路指してぞ落しける
あふみ ちさこ おち

四 急遽に姫を抱きつゝ
やに は ひめ いだ

六 近江路指してぞ落しける
あふみ ちさこ おち

三 近江路指してぞ落しける
あふみ ちさこ おち

244
180

大正二年十二月十二日印刷
大正二年十二月十五日發行

定價 金貳拾貳錢

著作權
所有
不許複製

橋 旭 翁 作 詞
筑 前 琵琶 歌

發行者 橋 一 定
東京市麴町區一番町三十二番地

印刷者 畑 中 爲 之 助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地

印刷所 國光印刷株式會社
東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 橋 筑 前 琵琶 宗 家
東京市麴町區一番町三十二番地

終

